古民家を拠点とした過疎山村地域と大学の交流による地域創造

かやの木会［三重県熊野市］

団体設立の経緯

南北朝最後の皇子「尊雅王」終焉の地とされている湯谷地区において、1992年に山林業「尾中銅治」氏を中心に、築百数十年の杉皮葺古民家「茅の木館」を拠点に「かやの木会」を設立し、紀伊半島山間に伝わる古民家保存と、山村の生活を支えてきた山仕事に係る道具等の収集保存を行ってきました。
しかし、この活動に係る賛助会員（サポーター）はピーク時には200人を超えていましたが、実際に活動に参加する人員は20人ほどで、高齢化が進むとともにその活動に支障を来す状況となりました。
そして、2012年を最後に、長年開催してきた「かやの木祭り」も中断を余儀なくされました。杉皮葺きであった古民家も維持管理の手が届かないことから、屋根をトタン葺きとせざるを得なくなり、ここに伝わる山林業における貴重な資料や伝承が、そのまま失われていくという状況に陥りました。
そこで、1998年以降いくつかの大学の社会調査実習の調査フィールドとして湯谷地区を含む五郷町が活用されてきた縁から、「かやの木会」を母体とした地域住民と学生との協働による村学協同委員会を新たに立ち上げました。

地域概要

三重県の南部に位置する熊野市は、ピーク時には34,000人ほどあった人口が、2014年9月には19,000人を割り込み、2015年中には17,000人台になろうとしています。高齢化率は35%を超え、「地方消滅」の消滅可能性自治体に数えられるなど、過疎高齢化が著しい地域となっています。
この地域は古来より平家や南北朝の落人伝説が残るところとして知られ、今回「かやの木会」の名の由来となった湯谷集落においては、いくつかの伝説と共に地名にもその名残が残されています。
基盤産業である山林業で栄えた地域ではありましたが、林業不況に加え過疎高齢化により林業従事者も減少の一途をたどり、今では数えるほどでしかなくなっています。
この集落の奥まったところにある旧尾中邸は、樹齢数百年とも言われる茅の古木とその石垣と共に古来の紀伊半島山間地の家屋の形態が残されており、昔からの山林業における貴重な資料が保存されているほか、現在も山林業を営んでいる尾中家には、この地域において古来より伝えられてきた「なすび刈り」という素材生産技術が唯一伝承されています。

設立年月・・・1992 年 4 月
メンバー数・・・20 名
代表者名・・・尾中銅治（おなか・こうじ）
連絡先・・・〒519-4463　三重県熊野市飛鳥町小阪 1022 番地
☎ 0597-84-0541　takoasak02@gmail.com
http://kayanoki.org/
団体のミッション・・・集落に伝わる木挽き歌や食文化など山村生活史を記録しながら、都市部学生と地区民との定期的かつ持続的な交流「山村遊学」及び都市住民との連携を図る「村都連携ネットワーク」の構築によって、地域の活性化を図っていきます。

会員と学生の手で「まつり」が再興された。企画に携わった中国からの留学生が開会宣言

活動に至った理由や背景

2013年12月1日(日)は、2013年度京都大学・関西学院大学等による合同社会調査実習の最後の日でした。学生がお世話になったお礼で各集落をまわっていたところ、ちょうど尾中鋼治さんと木挽きの体験をさせてくれる場で出会いました。

尾中さんはこの湯谷で林業一筋、機械を使わず自分の力で木を切ることができる数少ないひとりで、木挽きと言われるその技術を体験させていただくこととなりました。その際お聞かせいただいた木挽歌がとても心に響き、その場に居合わせた誰もがこの歌声をそしてこの技を残したいと願ったことが、このプロジェクトの始まりです。

しかしながら、この伝統を語り伝えようと長年続いてきた「かやの木祭り」も2012年を最後に途絶えており、その祭りを主催してきた「かやの木会」も休眠状態となっていたことから、何から手をつけていいのかまったく目途が立ちませんでした。

そこで、地元の方々との間で相談を重ねるうちに、HC財団の支援制度を知りエントリーを決めました。地元と大学との調整や地元協力者との協議にとまどったものの、結果としてなんとか採択していただき、このプロジェクトの実現に至りました。

活動の内容と成果

活動の始まり

この活動内容は、山村史のミニ博物館として活用された「茅の木館」に保存されている山仕事の道具・山村生活の必需品等の保存、木挽のうた・作業工程・枝打ち・杉皮剥ぎなどの記録、もう一つ大きな復活はこの地に20年続いた「かやの木まつり」をもう一度開催することでした。

まず、地元住民の方々の協働体制を構築するために、休眠状態であった「かやの木会」の元役員の皆さんにこのプロジェクトの趣旨説明を行い、多くの方々の賛同を得ることができました。大学との連携については、京都大学の社会学研究室を大学側の窓口として、これまで合同社会調査実習に参加してきた教員やOB、学生等による支援体制を整備し、熊野市在住の現地世話人を連絡員として活用することとしたのです。

当プロジェクトの実現のため「かやの木会」を再編するとともに、その下部組織として村学協働委員会を立ち上げ、実行委員会としての役割を持たすこととしました。6月初旬から大学においては調査方法や役割の分担などについて協議を重ね、地元においては委員会の構成等についての協議を発起人の間で行いました。

6月20日に地元のサポーター15名で第一回村学協働委員会が開催されました。6月27日には、京都大学、関西学院大学、京都教育大学、大阪私立大学などの学生実習にあわせて第二回村学協働委員会を開催し、地元の方々と今回のプロジェクトにかかわる大学側の参加者を交えた打ち合わせが行われ、「かやの木まつり」の復活を含めたこのプロジェクトが本格的に動き始めたのです。

古民家かやの木館で会長(この地域の当主)と学生が意見交換

新たに制作した「かやの木園」の木製サイン。会長と学生リーダーの手で

かやの木まつり
「古民家 in かやの木」の開催

大学側の役割として、まずネットワークを利用して、地元の人だけでなく地域外の方々にもこのプロジェクトに関心を持ってもらえようホームページを作ることから始めました。

また、今回のプロジェクトの目玉である「かやの木まつり」の日の決定については、地元行事と大学側のスケジュールに配慮することが必要であることから、地元において何度か会合が開かれ10月13日（祝）に決定しました。

そして9月半ばから数度にわたって祭り会場周辺を中心に、大学側からの参加者も得て草刈作業を実施するなどの作業の外、祭りの内容についても協議を続けました。

地元のまつりは学生の新しい発想で行いたいという意向から、木を使った大人も楽しめる遊びやこどもの体験学習、トレッキングなどが提案され、昔の木の遊び道具として作られた木馬（きんま）遊びの再現や、湯谷地区を巡る山村トレッキングがメニューとして組みこまれました。

また、まつりの名称であった「かやの木まつり」は、あらたな古民家を活用した交流の場としてという意味から「古民家 in かやの木」と決定し、ポスター・チラシの作成を行うとともに、各所に案内を発送するなど準備を進めたのですが、生憎の台風接近でやむを得ず11月16日（日曜日）に延期となりました。

やっと開催にこぎつけた「古民家 in かやの木」でしたが、地元の方々や学生等の合流による準備の結果、快晴のお天気にも恵まれ予想を超える300名近い参加者に来ていただきました。

会場では婦人グループによる地元郷土料理の再現や、木挽き体験、杉皮剥ぎの実演が行われ、ステージでは木挽き唄、盆踊り音頭、伊勢音頭などこの地域に伝えられてきた芸能が披露されました。また会場外では山村トレッキングに十数名の方が参加し、南朝の史跡や景観を楽しんでいただきました。

大成功に終わった「古民家 in かやの木」でしたが、今後の開催については、運営にかかわる住民の負担も考慮して間隔を置いた開催を目指すなどの方法で検討していきます。

村学協働委員会と
まつりスタッフ集合写真

「かやの木まつり」・・舞台裏

今回のプロジェクト、そもそもの目的は山村の記憶を記録すること、コミュニティの活性化に都市住民を呼び込むことで、その手段として「まつり」の再開を考えました。

結果として山村の記憶の記録はいろいろな形で達成できつつあり、都市住民とのコラボも今回調査に参画した大学のOGが地域おこし協力隊として五郷町に移住してきたことで、今後の動きに道筋をつけられました。

しかしながら、その媒体として活用しようとした「まつり」については、結果として300人近い参加者があの山奥に集うなど一見成功裏に終わった感がありますが、その一方で多くの課題を残すこととなりました。

その一つが、湯谷という集落の住民の多くが「まつり」に参加しなかったことです。「まつり」の主体となったのは、湯谷が位置する五郷町の婦人会、地域まちづくり協議会に属する有志、市内に居住する五郷町出身の方々、そして学生や大学関係者の方々でした。

湯谷地区の方の参加が少なかった理由として、この地区における複雑な人の関わりがあったからと考えられます。

今回のプロジェクトに参加した学生の中には、以前の「まつり」の運営が山村の主従関係での強制と受けとられ、地域住民の理解を得られなかったことが原因と分析しているものもいました。

また、地区が賑うことについて異論はないものの、以前行われてきた「かやの木まつり」の運営を巡っての不信や不満が参加を躊躇させたと思われます。

地区住民の高齢化も大きな要因であり、平均年齢80歳近い地域において個々の住民が「まつり」の手伝いをすることは容易ではなく、事前に手伝えないため、祭りの当日に参加できないということにもつながったと思っています。

五郷町のメンバーにおいても少なからず以前の失敗について懸念を抱いている方もおられましたが、やはり過疎地域の活性化のきっかけとしてこのような取り組みは不可欠であることから、実行委員会方式を基本にすることを確認のうえで、「まつり」を実施することとなりました。

紆余曲折はあったものの、実施する方向で確認されてからは、婦人の方々を中心に

「食」「伝承」をキーワードに「まつり」を成功させるべく盛り上がって行ったことは言うまでもありません。

当初、「まつり」への参加者は多くて100人から150人くらいと予想していましたが、ネットによる発信などにより、予想に反して多くの方々が集うこととなりました。その多くは五郷町以外から参加された方々であり、地元新聞情報により市内からいらした方もありましたが、遠くは大阪から参加された方も見られるなど、ネットの威力を改めて認識したところです。

学生たちのレポートでは、この種のイベントが地域活性化にもたらすものは少なくないとされる一方で、これだけにとどまらない外の仕掛け、たとえば都市住民との架け橋になる人材の発掘や、スローツーリズム、メディカルツーリズムを介した都市住民を誘う事業の創設などが必要との提言もされています。

また、今回の調査にかかわらず、今後大学との関係という枠を越えて、架け橋的な役割を学生たちが担うことで、村と都市との連携に貢献できるとの感想も寄せられていました。

当初からこのプロジェクトを企てるに当たり考えてきたことが、くしくも学生たちの中でも実感されたことは一つの成果であったかと安堵したところではありますが、やはりこの活動を継続していくには、ここ2年ほどの活動が大きな分岐点になることは間違いないと考えています。

しかし、地域住民をもっと巻き込むためには、氏神様である「石神神社」の祭りを再興する方が良いのではないかと言う意見もあり、「かやの木まつり」の開催については隔年開催の可能性も含め検討していくこととしています。

とにもかくにも、この企てを発案したものとしてはハラハラドキドキの展開ではありましたが、結果として五郷町だけでなく熊野市内の他の地域においても、村都学連携による地域活性化の動きが始まったことなど得るものも多くありました。

田舎に暮す人々は、日々の暮らしを楽しみながらも地域を守ることに疲れています。この種のイベントを開催することは地域の活性化を促す一方で、その疲れを助長することにもつながるということも考えていかなければなりません。

そのための村都学連携と思ってはいますが、地元の方々が「もてなさなければならない」という気持ちを強く持てば持つほど、連携が進まないということにも気付かされました。

地域が疲れない村都学連携…難しいことですが、道を探していきたいと考えています。

上:郷土食再現(地元婦人、学生の手で郷土食がよみがえる)
下:山の記憶を古老に聞く(山の暮らしの実態が赤裸々に)

山村の記憶の記録

2014年6月27日28日、9月13日～16日、11月29日、30日に京都大学・関西学院大学・大阪市立大学等の学生による合同聞き取り調査を行いました。26年度分の聞き取り調査についてはそのまとめが終わっており、27年度にも同様に生活史についての聞き取り調査を実施していきます。

また、ビデオ、デジカメによる記録については、山林作業や木挽き唄などの録画・録音・画像処理を行っており、今後27年度に撮影するものと併せてライブラリー化して保存して行くこととしています。

今後の予定

京都大学卒業生が、今年度から五郷町駐在の地域おこし協力隊として採用されました。彼女を活用して当初の目的のひとつであった都市住民との交流や、空き家情報の発信や滞留者によるコミュニティの維持について、地区住民、行政と協働しながら実施して行くこととしています。

茅の木の下で再会

古民家まつり 里山に久しぶりに活気

熊野市五郷町勝谷である古民家・茅の木の下に多くの住民や来場者が集い、活気のかやの木まつりin16日、「古民家まつり」が開かれ、今回、地域のシンボルを見せた。

同町では2011年まで20年にわたり「かやの木まつり」が開かれており、今回、山村の記憶を記録しているいう熊野市五郷町を中心とした市民有志とこれに賛同する京都大学や関西学院大学の学生らで組織する村都学連携事業が、住民と交流する会が企画し、村を復活させる催しを復活させ現在の状況などを調べた。

まつりが始まる前の午前9時からは、勝谷で刀鍛冶を含むて後世に残したいとグ、勝谷名所散策が内で勝谷トレッキン角会館一郎さんの案

【威勢よく木挽き体験】

【元気よく開会宣言する学生たち】

【ゆったりと交流を深める来場者】

【木登り実演する高中さん】

明された。

午前10時30分、学生たちが会場のイクリングで中国から留学生、タイ国の大学生が出席国際と日本語で挨拶し、まつりの始まりを告げた。

林業で栄えた勝谷では林業を中心に体験は、林業を中心に体験も行われ、来場者が昔のノコギリを使

いた丸太引きに挑戦した。屋中、大会がるこを続けた。開年ここ数年は、実施されず、ゆったり、8月子供会がこの日、なんでも味わえるお祭り、西さへとが、舞唄、唄、祭の声が漏れていた。

また、木馬きんまも満喫され、子どもたちが寒の上を滑って遊ぶ、懐かしい光景も見られた。会場では弾き鉄砲や

野菜の